



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano ©転載許可済 ©1982 精道教育促進協会(東京)三・三四五二 芦屋市船戸町12-6

教皇様の敵

キリストの王国

神の国はすでに私たちのうちにある

「私の父に祝せられた者よ、来て、世のはじめからあなたたちのために準備されていた国をうけよ。」(マテオ25・34) 世の終わりに王としてこの世の全ての人々の前に現われるとき、人の子は、「諸国の人々を前に集め、ちょうど牧者が羊と牡山羊とを分けるように、左右に分けるだろう。」(マテオ25・32) そこで右にいる人々に向かって、「国をうけよ」とおっしゃることでしょう。

永遠の愛の賜

キリストの王国は、永遠の愛、慈愛の賜であって、「世のはじめから準備されてきました。けれども、一人の人間によって死が訪れ」(コリント前15・21)、「すべての人がアダムによって死ぬ」(コリント前15・22) ことになりました。罪と共に、死が人間の歴史に入り込んできたのです。生命と不死こそ、永遠の愛

から生まれる王国のエッセンスです。

罪ではなく、恩恵が愛の王国のエッセンスなのです。罪と死は王国の敵です。人の心と歴史に入り込み、いま世界中にある罪悪全体は、罪と死の二つに要約できるでしょう。

慈愛は善がみちることを目指しています。「世のはじめから準備されていた」国とは、真理と恩恵、善と生命の国であります。世を善でみたそうとする神の慈愛は、死と破壊の烙印を押されたこの世に入ってきます。慈愛は、「この世の」罪と邪欲にとりつかれた心に入ってきます。慈愛は悪と相まみえ、罪と死とに敵対します。そしてまさしくその対決によって、慈愛は遙かに悪に勝るといふ事実があきらかになるのです。

しかしながら聖パウロは、この愛が、「世のはじめから準備されていた」国の完成にむけて、いかに長い道のりを旅せねばならないかを教えてくれます。王たるキリストについてしたためながら、パウロは次のように言っています。「キリストは、すべての敵をその足の下に置くまで支配しなければならぬ。最

後の敵としてたおされるのは、死である。」(コリント前15・25・26)

死はすでにたおされました。王として主としての勝利を示されたキリストの復活において、死はたおされたのです。

けれども死は世を支配し続けます。つまり「アダムによってすべての人が死ぬのです。」罪の重さが人の心とその歴史にのしかかっているからです。とくに現在、重くのしかかっています。

慈愛の力のなんと偉大なことか。キリストがすべての敵をその足の下に置き、完全に罪に打ち勝って、最後の敵としての死をたおすまで、私たちはその慈愛を待ち望まなければなりません。

キリストの王国は、慈愛が最終の勝利を得るまでの緊張状態、善と恩恵、救いと生命が世のおわりに成就するまでの緊張状態であります。

この完成された状態は、この世においても、十字架と復活のうちにすでに垣間みることが出来ます。十字架につけられ、復活されたキリストは、慈愛を完全に啓示する御方であり、人々の心の王なのです。

キリストが支配せねばならない

キリストは、「父なる神に国をわたす」(コリント前15・24)まで、十字架と復活によって、支配しなければならぬ。人の心を罪の奴隷にし、世界を死に屈従させる「すべての規範や権勢、能力をたおした」のち、「すべてのものがキリストの下に置かれる」とき、御子みずからも、すべてのものを「自分の下に置いたお方に服従なさるでしょう。」(それは、神がすべてにおいてすべてとなるため)(コリント前15・28)なのです。

これが、「世のはじめから」準備されていた王国の定義であります。これこそ、神の慈愛の最終的な完成です。

神がすべての人にすべてとなること。世界中で、「み国のきたらんことを」と日々繰り返している人々はすべて、一言で言うなら、「神がすべてにおいてすべてとなるよう」祈っているのです。しかしながら、「一人の人間によって死がやって来ました。」(コリント前15・21) 死、それは人の靈魂からみれば罪ということになります。

「ごらんなき、この死と罪のうちにとどまっている人間、まさにそのはじめから」(あなたは神のようになるだろう)(創世の書3・6) という言葉に誘われた人間は、「み国のきたらんことを」と祈りながら、不幸にもみ国の来臨に反対し、拒絶さえしているのです。そのような人々は、神が「すべてにおいてすべて」となったあかつきには、自分のために一体何が残されるのか、と語っているみたいで、この世の終わりにくる王国はおそらく人間を吸収してしまうのではないだろうか、その国は人間を絶滅させるのではなからうかと。

もし、神がすべてであるなら、人間は無であって、存在しないに等しい。これは、神に背を向けよ、神の国には断固として敵対せよ、と勧める人々が宣言していることです。彼らは、このようなやり方でしか自分自身の王国、人間の王国は建設できないと思っっているからなのです。

神の慈愛の力強さ

(…)このような人々は、罪が人間を拘束し続ける限り人間は支配者にはなれず、死が人間を支配している限り、人間は真の王ではないことを理解していないようです。人間の心を悪にかたむかせ、人間の才能の働きを恐ろしい破壊のもとにさせる「権勢や権力、能力」から、人間を自由にできないような王国とは、一体どのような国なのでしょう。

これは私たちが住んでいるこの世界のことなのです。人々は断固として神の国をしりぞ

け、この世を自分たちのためだけの世界にしようとしています。ところで私たちは、神の国はすでにこの世に「ある」ことを知っています。神の国は敵として存在しています。この世に、私たちの世の中に、すでに存在するのです。現代人と現代世界にはどれほどの愛の力が必要なのでしょう。どれだけ強い慈愛の力が必要なのでしょう。すでにこの世にある王国が、人間の心を罪にいだない世界中に恐ろしい破壊の脅威をおし広げる「権勢、権力、能力」の国を、無に帰することができるために、キリストの十字架と復活の中に、どれほど大きな慈愛の力が示されねばならないことでしょうか。「彼は支配しなければならぬ...」

よき牧者

キリストの支配とは、すべての人、すべてのものを御父の方へ導くことです。キリストは、「父なる神にみ国をわたす」(コリント前15:24)ため、すべてのものを自分の下に置いたお方に服従するため(コリント前15:28参照)、支配なさるのです。

主は牧者、よき牧者として支配されます。牧者は、羊を愛し、世話をします。羊が散らされないように守り、「きりとやみのなかに散り散りになった」(エゼキエル34:12)羊を集めます。(…)

牧者は言います。「私は自分で羊を牧し、彼らを休ませる……。私は、失ったものを探し出し、迷ったものを連れかえり、傷ついたものを巻き、弱ったものを強め、よく肥えた強いものを守り、よろしく彼らを牧そう。」(エゼキエル34:15-16)

羊の群れは言います。「主は、私の牧者、私には、乏しいものがない。緑の牧場に私は私を横たえ、物静かな水際に、つれて行く。主は、私の魂をつよめ、正義の小道に立たせた、そのみ名のために。……ああ、いづくしみとおん情けとが、私と共にある、生涯の日

日に。私の住居は、主の家、日のつつく限り。」(詩篇22(23)1-3と6)

これは、教会が日々交わす会話です。牧者と羊の群れとの対話であり、この対話のうち、「世のはじめから準備されていた」(マテオ25:24)王国が発展していくのです。

王たるキリストは、よき牧者として、いろいろなやり方で羊の群れをととのえます。つまり、「神がすべてにおいてすべてとなるために」(コリント前15:28)キリストが御父にわたさねばならないすべての人々に準備をさしてくださいませるのです。

国をつけよ

キリストはその日すべての人に向かって、「私の父に祝せられた者よ、来て、国をうけよ」(マテオ25:34)と、どれほどおっしゃりたいことでしょうか。

キリストは、この世のおわりが訪れたとき、次のように言うことができ、と望んでおいでです。「……あなたたちは、私が飢えていた時に食べさせてくれ、かわいている時に飲ませてくれ、旅にいた時に宿らせてくれ、裸だった時に服をくれ、病氣だった時に見舞ってくれ、牢にいた時に訪れてくれたからだ。」

高齢者の知恵と経験

かけがえのない存在

1 本日は高齢者のみなさんに心を開いてお話ししたいと思います。ご降誕の季節には、イエルサレムの神殿で救い主を迎えたシメオンとアンナの姿をながめました。全生涯をかけて救い主を待ち続けたこの二人は、世を去る直前にその御姿を目にすることができました。シメオンのすばらしいことばに耳を傾けてみましょう。

(マテオ25:35-36)

キリストは、たった一つの愛徳のわざによってでもよい、ご自分のみ名において冷や水を一杯のませるだけでもよい、とにかくその愛徳をみて弟子であることを知ることができれば、と望んでおられるのです。(マルコ9:41参照)

キリストは、羊たちを一つの囲いの中に入り、右手の方に集めて、おおせになりたいのです。「世のはじめからあなたたちのために準備されていた国をうけよ。」

同じたとえの中で、キリストは「左に」くるとはみ国をこぼんだ人たちのことです。神の国がこの世の王国を「掃く」ことと考えて、神をこぼすだけでなく、人間をもこぼしてしまいました。彼らはこぼされた人を宿らせず、訪れず、食物や飲物を与えることもしなかったのです。

要するに、キリストの王国を最後の審判の言葉で表わせば、人間に対する愛の国であると言えます。有罪宣告の根拠は、まさにこの点にあります。「これらのもともも小さな人の一人にしてくれなかったことは、つまり私にしてくれなかったことだ。」(マテオ25:45)

「みことばどおり、主よ、今こそ、あなたのものもべを安らかに死なせてください。私の目はもう主の救いを見ました。その救いはあなたです。」(ルカ2:29-32)

キリストについては多くが語られましたが、このシメオンのことばに勝ることはないと言えそうです。永い間希望を保ちつづけた信仰からであると同時に、年長者に特有の知恵があらわれることばであるからです。

ですから、これが、人間に対する愛の国、真実の愛の国なのです。従って慈愛の国であるわけです。この国は、「世のはじめから準備されていた」愛の賜です。それはまた愛の実りでもあります。人間と世界との歴史の流れの中で、無関心や利己主義、怠慢、憎悪という障害をのりこえ、肉の欲、目の欲、生活のおごり(ヨハネの第一の手紙2:16参照)にうち勝ちながら、神の愛はたえず前進しています。すべての人が身に帯びている罪の源をのりこえ、例えば今世紀、我々の世代にのしかかっているような人間の罪と悪事の歴史をのりこえ……つまり、すべてをのりこえて前進しているのです。

慈愛なる神、私たちの願いをかなえてください。

人間の中に、また世の中にあるすべての悪よりも常に偉大であってください。今世紀、我々の世代に増えてきた悪よりも偉大であってください。

十字架につけられた王の力によって、もっと力強くなってください。

「来たりつつあるみ国の祝せられんことを。」(一九八一・十一月二十二)

福音書では預言者と称されるアンナも、すでに老齢ではありましたが、「神殿を離れず、断食と祈りで、夜ひるなく神に奉仕していた」(ルカ2:37)ました。

2 本日は、これら二つのすばらしい証言とご降誕について祈り、黙想してみましよう。当然たたえられるべきでありながら往々にして忘れられていることを思いおこすため、

教会は年長者の役割についてお話ししたいと思います。そこで私は一九八〇年十一月ドイツで申しあげたことをまず繰り返したいと思います。「私は高齢者のみなさんに深い愛と尊敬の心をあらわすと同時に、多くの方々にも同じこ

説教・講話・書簡等の抄訳

とをしてくださるようお願いいたします。老年とは人生の冠のようなもの、収穫の時だと言えます。今までに学び、経験したこと、今まで行ない、やりとげたこと、今まで苦しみ、耐えてきたことを取り入れる時なのです。偉大な交響楽のフィナーレのように、生涯のすべての旋律が組み合わさって力強く調和のとれた楽の音を奏でます。そしてこの調和から知恵が生まれます。若きサロモン王が祈り求め、権力や富、美貌や健康よりも強く願ったもの、旧約聖書の生活規則に書かれてある知恵のことなのです。『老人に知恵があり、この世の指導者に熟慮と諫めとがあるのはいいことだ。老人の栄冠は豊かな経験であり、その誇りは主への畏れである』(集会の書25・5以下)、『教皇様の声』昭和56年8月10日、第16号)

高齢者は、家族と社会にとって、貴重な存在、というよりかけがえのない存在であると言えます。若い親やその子どもたちにとって高齢者の知恵と経験は大変な助けになるのです。人生経験の長い人々の助言とそのおこないは色々なグループの活動に役立ちますし、それらグループのなかでも高齢者の働き場所は数多くあるわけで、活動分野は社会、教会の両方に及びます。高齢者の方々に感謝の心をもたねばなりません。

3 ところで、高齢者ががわでも、健康や孤独をのりこえるために、助けと慰めを必要とするはずですが、時間と方法をみつけれ、大変困っておられる高齢の方々の助けになる人々に心から感謝いたします。高齢者の方々に、養老院などで見捨てられ、忘れられ、人の心の暖かささえ知らない人々もいるのです。

私はとくに、高齢者を物心両面から援助する若い人たちに感謝の意を表わすと共に、さらに励ましの声を加えたいと思います。(…) みなさんが今後も、高潔な心からである値うちある仕事を続けてくださるようお願いすると共に祝福いたします。(一九八二・一・三)

福音書に照らし合わせた青年期の諸問題

「あなた方若者の持つ問題」や苦しみは、全般的なとらえ方かもしれないが、私もよく知っています。物事の移り変わりが激しくなるにつれて若さにはつきものの不安定さがつまらぬ批判精神によって、真理に対する不信感が強まり、将来や就職の困難をみるにつけても不安は高まります。享樂を第一とする社会の中で欲望がみち溢れ、あおりたてられていくこと、進歩がもたらした思わぬ辛さ、騒乱や逃避、放縱への誘惑など、これらすべてがもう我慢できないほどです。私もみなさん方と共に、高い次元から物事をみたいと思います。このひどい環境から抜け出て、真に人間的な生き方、つまり神につながる生き方を再発見したいと望んでおられることを、私は信じています。みなさんの人間としての召命の意味は、端的には、キリストにあるのです。

性と道徳

人間は「肉体」を持っていて、とても単純なことですが、これには、さまざまな問題がつきまといまいます。肉体はモノなのですが、ただのモノではありません。まず、身体は「誰か」なのです。すなわち、身体は人格を表わし、自分以外の人々の間に居るための手段であり、きわめて多様なコミュニケーションや表現の手段なのです。ひとことで言うなら、身体はひとつのことばです。素晴らしいと危険とを同時にあわせているのです。みなさん、あなた方

若者へのメッセージ

自身と他人の身体を尊んでください。身体が、本当の「自分」に役立つように。あなた方の表現や視線がいつも魂を映し出すように。肉体を賛美することなどできません。かといってさげすんでもいけない。肉体を「支配」するのは、肉体的変容ができればなお良いでしょう。それができていれば、日常の仕事に精をだす多くの男女の魂がすばらしく透き通って見えることでしょう。今の時代がつけつける挑戦を受け、みなさんがそらって、キリスト者として肉体支配のチャンピオンとなるように私は心から望んでいます。正しい意味でのスポーツは現在、プロの世界外で盛んになっていますが、スポーツをうまく使うと大きな助けとなるでしょう。青年や大人の生活に「性」の要素を巧く組み入れるためにはぜひとも肉体を支配しなければなりません。現在、性について話すのがむずかしくなっています。理由はあるにしても、残念なことに、性的本能をおりたてる狂乱時代であるからです。みなさん、いつの時代でも、肉体の結合は、二人の人間が意を通じ合う際の最も強力なことばでした。だからこそ、男女の聖なる神秘に関するそのようなことばは、男女が互いに相手を完全に所有できるための条件が整い、それが結婚という形で公にされるまで、愛の行為を実現させることはできないのです。肉体の価値について、健全な見方をとりもどし、守ってください。

まず、人間のあがない主キリストを黙想しなさい。キリストは肉体となつた言葉であります。大勢の芸術家たちはキリストの肉体をリアルにえがき、キリストが、貞潔によって高められた性をふくめて人間性のすべてをおとりになったことをはっきりとわからせてくれます。

霊の卓越性

「靈魂」は、人間と動物とを区別し、世界を支配させる力を与える天与の賜です。靈魂と、私が呼んでいるのは、理解し、望み、愛することのできる魂のことです。だからこそ、人間は人間なのです。あらゆる努力を傾けて、あなた方と周囲の、靈魂の聖なる領域を守りなさい。残念なことに、今だに、靈魂の働きを阻止する全体主義的な体制があり、靈魂をもった人間にふさわしい生き方を脅かす、人間を単なるモノの一状態であるかのように考えています。人間の内なる力、自由と愛の力をうばい取っているのです。また、産業の飛躍的な発展を誇る一方で、人間の零落と崩壊を早める経済体制があることもあなた方は知っています。本来からすれば、人間の均衡ある全体的な発展と、深い兄弟愛に支えられた相互の繁栄のために寄与すべきマス・メディアさえも、知性と想像力を消耗させ、鈍化させ、健全なものとならないうと見分ける能力を失わせて、靈魂と精神と心の健康を害している始末です。たとえ立派な社会的、政治的な改革が行なわれようと、良心でもある靈魂が、その輝きと活気を失なうとすれば何になるでしょう。このような世界から逃避することなく、その中であって、もっと省察し、もっと考えるようになってください。あなた方の勉学は、靈的な生活を学ぶために非常に貴重な時でなければなりません。スローガン、いつわりの価値、幻影、袋小路の正体をあばき出しなさい。心を潜め、内的な生活を営んでください。あなた方ひとり一人のできる範囲で、人々が靈魂の卓越性を大切にしよう、また将来、いやもっと先、つまり永遠に続く価値を大切にしように貢献すべきです。このような生き方をすれば、信者未信者を問わず、みなさん方は神のすぐそばに

不変の教え

聖人たちは年をとらない

(…)聖霊は教会のなかであまたの聖人を導かれましたが、その導きは今も続いています。聖霊に栄えあれ!

教会はこのように霊的なたまものに満たされています。このたまものは、見える世界、見えざる世界での神のみわざと同じく、多種多様であり、それぞれが変化に富んだ輝きをみせています。おのおのたまものは、人間の内的神秘を反映すると同時に、教会史と人類史の各時代の必要に応じているのです。このことはリジューの聖テレジアにもあてはまります。聖女はつい最近まで私たちと同時代の聖人でありました。私自身は聖テレジアを私の世代の間であると感じていました。ところで現在でも「同時代の聖人」であると言えるのでしょうか。現に教会のなかで成人に達せんとする世代にとって、そうは言えないのではないのでしょうか。人々にたずねてみなければなりません。いずれにせよ、聖人たちは絶対に老いることなく、決して「時代遅れ」になることもない、—私はこう申し上げます。聖人たちはつねに教会の若さの証人です。決して、過去の人、昨日の男性・女性にはならず、つねに、明日の男性、明日の女性なのです。人類と教会の福音的未来、つまり未来の世界の証人であり続けるのです。

(一九八〇・六・二)

病に伏す人々へ

主において敬愛するみなさん/この「慈愛の大聖堂」で、御ミサの前にお話するはずが、御ミサの後になったことに私は格別の感をおぼえています。まず、みなさんへの私の愛と敬いの心を知っていただきたいと思えます。神の摂理はしばしば神秘につつまれています

が、それはつねに神の無限の知恵と思いやりのある愛のあらわれです。神の摂理によってみなさんが歩んでおられる困難な道を、勇敢に忍耐されるようお勧めしたいのです。

福音書にはイエズスと病に苦しむ人々との出会いがたびたびえがかれてあります。イエズスはどのような苦しみをもみても無関心でいることはできず、助けの手をさしおのべ、慰めることばをおかけになります。イエズスの態度はそのまま教会に伝えられました。教会は、病に伏す人々を愛し、信仰に照らされた言葉と事情がゆるすかぎりの助けをさしだすことを、イエズスから学んだのです。

もうおわかり願えるでしょう。教皇は苦しむみなさん一人ひとりにお会いしたいと望んでいます。みなさん方一人ひとりに、ふたた

愛するみなさん

のすべての子らに愛と自由の国の市民権を回復させていただいたのは、(…)愛と死によってでありました。(…)

その王国は、ここ地上の教会において宣べ伝えられ、天において完全に実現されるであります。

十字架上でのキリストのご死去は人類史に決定的な方向を与えました。人間の歴史を舞台としてつづけられる善と悪との劇的な戦いをみながらも、善は必ず勝つと断言できるにはどうすればよいのでしょうか。ゴルゴタの丘で「万人のために一度だけ」ささげられたいけにえを、祭壇上で新たに作る御子、その御子との愛の交わりのうちに、私たちが苦しみを受けいれ、そしてささげるほかに道はないのです。

び神の愛をもたらし、希望をあらたにしてくださるよう、強く望んでいるのです。苦しみは、キリストご自身がそれを背負ってくださったので、計り知れないほど大きな価値をもつようになりました。苦しみは、それに耐える人々と全人類にとって、救いの原動力となったのです。

そこで私もみなさんを支えにしています。地上におけるキリストの王国の建設を押しすすめるみなさんを頼りにしているのです。(…)ご存知の通り、イエズスは力でも国を征服なさったのではないし、その将来を武器を使う暴力におまかせになったのでもない。(神は十字架上からお治めになるのです。)

イエズスが、悪の力にうち勝ち、人間がおかれていた絶望的な状態を好転させ、アダ

ご死去と復活の真実の過越によって、再びイエズスがおおいでになる聖体祭儀にあずかる今、私たちは救いのみわざに参与するといふ、この神秘的で魅惑的な点について思いめぐらさなければなりません。(…)

みなさんの苦しみを私にお与えください。私はみなさんの苦しみを祭壇上でささげ、御ひとり子の御苦しみとひとつにして父なる神にささげます。

また、主のみ名において、教会のために平和を、国家どうしの相互理解を、罪を犯した人々のために謙遜な悔い改めを、感情を害された人々のために寛大な赦しを、すべての人のためには神の慈愛を、再び経験する喜びをお願ひしたいと思うのです。主が私たちのために亡くなられた時、十字架のかたわらに立

修道女のみなさんへ

っておられた(ヨハネ19・25参照)聖母が、この光と恵みのときにふさわしいところをお与えくださいますように。アーメン。(一九八一・十一月二十二)

観想の領域のことが全修道生活刷新の秘訣です。そして日本人はこの要素について特に敏感です。観想的生活をたえず深めてください。皆さんの修道院を祈りの場、観想の場にしてください。あなたがたの修道院を、多忙な日においても常にあなたがたの対話の最も大事な相手であり、また当然そうあるべきお方との、個人的なまた共同体として、親しく会話を交わす場所にしてください。現代の消費社会がもたらす物質偏重の活動主義と精神散逸の誘惑に迷わされなくてください。

祈りがなければ皆さんの修道生活は無意味になります。修道生活はその根源との接触をたたれ、中味のないものとなり目的を全うできなくなります。祈りこそ皆さんを花婿たるキリストに結び合わせる絆なのです。『エバンジェリカ・テストイフィカチオ』の鋭い次の言葉をよく考えて下さい。「歴史の証明を忘れてはいけません。修道生活が活気に満ちているか、それとも衰微していくかの試金石は、祈りに忠実であるか、それとも祈りを放棄しているかによるのです。」

この言葉を心にとめながら、日本で禁域の修道生活をおくるシスターの皆さんに、私は特別なあいさつと励ましの言葉を送ります。皆さんは「教会の心臓」の奥深くに住んでいるのです。霊性と教説のゆたかな遺産に基礎づけられた、皆さんの熱心で絶え間ない祈りは、世界への贈り物であり、同時に世界へのチャレンジでもあります。観想の方法と観想の体験を、熱心に探し求めている人々への解答でもあります。(一九八一・二月二十六)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部六十円送料六十円 一年予約七百二十円送料七百二十円 二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393